

わたしの「現代国語」教室（一）

——伊東静雄への入り口——

加藤宏文

わがひとに与うる哀歌

太陽は美しく輝き

あるいは 太陽の美しく輝くことを希い
手をかたくくみあわせ

しずかに私たちは歩いて行つた
かく誘うものの何であらうとも

私たちの内の

誘われる清らかさを私は信ずる

無縁のひとはたとえ

鳥々は恒に変わらず鳴き

草木の囁きは時をわかたずとするとも

いま私たちは聴く

私たちの意志の姿勢で

それらの無辺な広大の讃歌を

ああ わがひと

輝くこの日光の中に忍びこんでいる

音なき空虚を

歴然と見わくる目の発明の

何になろう

如かない 人気ない山に上り

切に希われた太陽をして

殆ど死した潮の一面に遍照させるのに

（かなづかい・ふりがなとも、筑摩版「現在国語2」によった。）

はじめに

伊東静雄の処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』（一九三五年刊）の諸編は、絶望的な現実を、きわめて緻密な「理」で匿した、「メノン（堪え忍ぶ者）」（注1）による叙情の世界である。諸評は、つぎのように言う。

① 一見難解とは思われぬ作風であるが、その底に無数の宝石の粒をひそみ匿し、その匿し方もこの詩人独特のひとすじ縄では行かぬものを持っている。（注2）

② 事實は何一つ変りはしない。むしろ悲惨な現実を、精妙な計算と強靱な意志によって、こうした正しい表現に転嫁させるところに、アイロニーの詩法の要請があったと見るべきである。(注3)

③ すでに存在している主題を言葉によって可能な限り消去してゆき、その消去法から結果するはずの、言葉の充溢した空無のうちに、時空の日常的限定を脱したポエジーそのものの出現を期した(注4)

④ リズム感を自虐的に抑止するというか、リズム感が非常に屈折していますよね。そういったところ、うたうというよりは自分の内面をつねに内省し折折していくような文体ですよ。(注5)

⑤ 理論的にはもはや常識だが、これ(加藤注 強烈な精神による独自の発想法、つまり普遍的な「内容」としての思想ではなく主体的な「発想」としての思想)を身をもって実践したところに伊東静雄の新鮮さがあった。(注6)

わたしたちは、この「精妙な計算」を、「逆算」するところから出発し、何とかして、「アイロニー」を理解し、「強烈な精神」に触れたいと思う。

ところで、わたしたちは、詩は、特別のセンスを持った者にしか理解できほしくない、という偏見を持っている。ために、詩の単元に入ると、拒絶反応がまず生まれ、とまどう。

ついでには、特別の「センス」ではなく、日常レベルの「理」にたちもどり、そこから出発して、「入り口」を確かなものにするには、どうすればよいか。試してみた。

なお、本年度「現代用語」の、わたしの計画は、つぎの三つの骨子のもとになる。(注7)

一、年間、五つの教材にしぼる。
二、一教材に、一〇時間前後をあてる。

三、グループ学習を、継続的に生かす。

以下は、この第一学期後半の一〇時間で、伊東静雄の詩六編(注8)を扱ったうち、「わがひと」と与うる哀歌」からの報告である。

一 グループでの着語

△タイトルについて▽

① (1)「わが」は、どこにかかるとか。(2)「ひと」とは、誰なのか。

② 「わがひと」は、存在するのかもしれないのか。これが、なぜ「哀歌」なのか。

③ まず、タイトルの重みにみあうだけの「わがひと」像が描かれていないことについての、卒直な疑問がみられ、そこから、「わがひと」ととらえること自体まちがっているのではないだろうかとか吟味し、さらに「理」を求めている。(①・②)

また、「哀歌」も、本文中に「讃歌」とあるだけに、いっそう疑問が深まっている。(②) 徹視的・部分的な「理」の追求だけでは、すぐに壁にぶつかってしまう。

この二つの疑問をつきつめることは、とりもなおさず、伊東静雄の計算を「逆算」することであり、素朴であるだけに、いっそう貴重な着語として、みつめ合わねばならない。

△第一のセンテンスについて▽

① 前の太陽は、自然の太陽であり、後の太陽は、作者の希いの内の太陽であると思うが、なぜ希うのかがわからない。また、い

ずれにしても、太陽は、愛情の清らかさの象徴であり、時勢をもたえていてのではないか。

② (1) 太陽は、何かを暗示していて、(2) 二人の恋を祝福するかのよう「輝き」、(3) 「希い」とあるから、一方では、何か不安を感じている。それは、後半の部分につながる。

③ 美しく輝く太陽とは、二人の恋を祝福するかのよう「輝く」、自分たちの恋への讃歌の一要素であり、美しく輝くことを希われた太陽とは、破局、つまり「もうあかん」という哀歌の要素である。

④ 前の太陽は昼であり、後の夜のである。現実には輝いているかどうかかわからないが、とにかく、伊東静雄の「心の中」では、輝いているのだと言いたいのではないか。

⑤ 過去の「私たち」は、漠然と周囲の状況を受け取っていた人たちで、単なる太陽というのは、「無縁の人」であった自分の目に見えた太陽で、「一切に希われた太陽」というのは、現在の私達の目から見る太陽である。

⑥ (1) 実際に歩いて行ったのか。象徴的な意味か。(2) 歩いて行くのはなぜか。(3) だれとだれとが手をくみあわせたのか。

⑦ まず、いずれにも、できるだけ具体的なイメージをとの努力がうかがえる。しかし、たとえ、ひとつひとつの「太陽」をおさえた上で、「存在し、かつ存在しない」という「論理的」な「矛盾」(注9)を、とらえきっていないために、伊東静雄の「計算」が、その「矛盾」にも及んでいることには、気づいていない。「あるいは」に注目して、二つの「太陽」が同時に登場していることの意味を、さらに吟味したいものである。

一方、「希い」とある動詞の特性に注目し、ひと押し深まりえて

いる例も多いし(①・②・③)、「時勢」(①)・「不安」(②)・「哀歌」(③)・「心の中」(④)・「現在」(⑤)など、いうとらえ方には、直感的にはあるが、伊東静雄の「二面性」に至りえての深さがうかがえる。

△第二のセンテンスについて▽

① (1) 「かく誘うもの」には、何か大切な意味が含まれていそう。作者と愛人との間のことか。(2) 「誘うもの」とは、誘惑か、作者自身か。何に誘われても、ついで行くというのか。(3) 「誘われる清らかさ」とは、二人の愛の純粋さか。誘うものに誘われるのが、純粋か。(4) 「信ずる」で切れるのではないか。

② 「かく誘うもの」とは、そうしたいと望む恋の衝動を起こさせるもので、そうしたいと願う気持ち、恋の清らかさの証明である。

③ 「かく誘うもの」で、作者は、遠まわしに、本能というか、肉体的な欲望を言っている。だから、それを「邪悪」と見る考えと対比して、たとえそう言われようとも、「清らかさ」を信ずると言っているのである。

④ 二人は、歩いて山へ行った。それは、何やら得体の知れないもの誘いかも知れぬが、二人は、それが正しいことを信じるといふことである。

⑤ 私たちは、誘うものが何であれ、成行きまかせに歩いていく。その姿勢は、自然であり、つまりは、「清らかさ」である。そして、その「清らかさ」は、私にとって一番大切なもの・「意志の力」に通じる。

⑥ まず、「何であろうとも」が、相手に、仮に悪魔であっ

て、地獄へ結果的に誘われることになってよい。」という意味であり、……とも、……私は信ずる。」という構文上の役割りを持つという点が、はっきりとみきわめられていないために、自信のある読みに至りえていない例がめだつ。(①・②・③)

また、副詞「かく」と最初のセンテンスとの関係が、吟味されていないための不十分さもめだつし、一方では、正しくとらえられはしていても、「清らかさ」と「意志の力」との結びつけどまりで(④・⑤)、「成行きまかせ」(⑥)と表現してしまっている。

△第三のセンテンスについて▽

① 「無縁のひと」とは、誰か。(2)誘われる清らかさをもっていない人のことか。(3)「無縁のひととはたとえ」は、「かく誘うもの」の前にはいる倒置法である。

② 「無縁のひととはたとえ」は、倒置になっており、どこか前につながるのではないか。

③ (1)私たちの意志とは、何か。(2)「それら」は、何をさしているのか。(3)努めて邪念を捨て(誘われる清らかさをもって)自然に耳を傾ける姿勢ではなかるうか。

④ 「讃歌」は、小さなものから、無辺な広大、といえるほどのものを見つけ出すとする姿勢・私たちの意志の姿勢によって聴かれるものである。

⑤ タイトルの「哀歌」とこの「讃歌」との関係は、どちらかと言えば、「讃歌」の方が強い。これから何かをやるうという意志がうかがえる。希望と不安が背中あわせになっている。

⑥ やはり、無縁の人々のことばも半分は頭の中にあるので、それを押しつけるには、意志の姿勢が必要なのである。

◎ まず、「私」によって、ひとたびは引用されている「無縁の人」の主張は、構文上からも、はっきりとはおさえられてはいない。(①・②)

つぎに、「哀歌」と「讃歌」との関係については、直感的には(④・⑤)、また、「意志の姿勢」が支えている「二面性」についても、「希望と不安が背中あわせ」(⑥)とか、「半分は頭の中に」(⑥)とかと、鋭いとらえ方がなされている。

△第四のセンテンスについて▽

① (1)「目の発明」とは、どういう意味か。(2)何が何になるのか。

② 恋人が死んだのではないかとも思う。しかし、直前で「意志の姿勢」といっているのに、そんなに急に陽から陰へ変わるとは思えない。人の間に、何か知らないが、隔たりができてくるようだ。

③ 彼は、彼女の中に、「太陽」と表現している何かを見出しかけていて、それが形をもって見出せない。そのあがき・もがき・かなしみが、「音なき空虚」である。

④ 「讃歌」を見出そうとすることを、「意味をなさない。」ときめつける他人の意見を言っているのではないか。自分の確固たる意見の中に入り込もうとする得体の知れぬ他人の「もの見方」のことである。

◎ まず、前のセンテンスとの、内容上の結びつけができていないため、「空虚」ということばの登場を、ひじょうに唐突に感じとって、まごついている。(②・③)

また、ぎくしゃくと屈折したリズムも作用してか、文節関係もつかめないでいる(①)

しかし、中には、「讃歌」と「空虚」との関係をみつめて、そこから、この詩の核心に鋭く迫りえている例もある。(4)

△第五のセンテンスについて▽

① (1)誰が山に上るのか。(2)なぜ「切に」希うのか。(3)「殆ど死した湖」とは、作者と愛人との間の心の象徴。(4)終りの三行がまったくわからない。(5)このあとに何がつづくのか。

② 「如かない」とは、「及ばない」ということだから、「目の発明」が、「切に希われた……遍照させるのに」「及ばない」としか考えようがない。そうでないと、修飾関係がまったく狂ってしまう。

③ 「殆ど死した湖」とは、恋がやぶれて、以前のような幸福な状態がなくなり、ものさびしくなった作者の心うち。

④ 死んだような湖にもさんさんと……。それにくらべたら「空虚を……発明」など、何にもならない。切に希われた太陽のように限りなく愛せといっているのだ。

⑤ 他人の、馬鹿げた意見に耳を貸したところで、何になるのか。ただ、我々の希望・太陽を、せいっぱいに輝やかすのみだというのである。

⑥ 「切に」とあるのは、独断でここまで来たが、このままでは崩れてしまいそうな不安があるので、さらに太陽を輝やかせないとはいられないからである。

⑦ まず、「如かない」の構文上の役割りが、つかめないままに、とまどっている(1)ものの、一方では、「理」からの追求が、形の上での必然に到達しえてもいる。(2)

つぎに、前のセンテンスの内容との優劣関係で述べられている主

張を、形の上でははっきりさせていて(4)も、内容上の理解には至っていない例(3・4)もある。

しかし、中には、「切に」に注目して、核心に迫りえている例もある。(6)

このように見てくると、各グループから提出された第一次の着語は、(A)直感的には、鋭く核心に迫りえてはいると言えるが、しかし、(B)「理」からもいまひと押しとも惜しまれる。

わたしたちは、この鋭さを、何とかして、「理」で磨き上げ、おたがいに納得し合える「読み」を持ち始めたいものである。

二 わたしの発問

そこで、わたしは、このような実態をそのままに、各グループに向けて、まず、つぎの発問を試みた。各問いのあとの二項は、グループより提出された「答え」の例を、そのまま記したものである。

① 「太陽」は、(1)事実としては、輝いているのか、いないのか。(2)また、「私」は、それをどう認識しているのか。

○ (1)輝いてはいない。現実仮想と解釈。なぜなら、「希い」とあるし、後半に希望がみられないから。(2)実際には輝いていないが、輝いてほしいと思っている。太陽は、作者の理想・愛を表わす。

○ (1)現在は輝いていない。輝いていれば(現在)この詩は書けない。(2)恋の終りを自覚しているのだが、でもやはり希望を持ちたい?あきらめ?

② 第二・第三の「文」で、(1)「何であろうとも」は、どの文節

につづくのか。また、(2)「たとえ」は、どの文節につづき、さらに、その文節は、どの文節につづくのか。(3)その結果、第三の「文」での主語・述語は、何々とわかるか。

○ (1)信ずる (2)するとも 聴く (3)私たち・聴く

○ (加藤注 右に同じ。ただし、以下の注記あり。) 述語動詞と逆接の接続詞が抜けているのだ。するとも……聴かない。しかし……聴く。と。

③ 「無縁のひと」とは、(1)どんな考え方をする人たちで、(4)それは、どの部分からわかり、(4)その部分は、どう解釈されるか。(2)それに対して、「私」は、どう考えているのか。

○ (1)あんまり感動しない人 (4)鳥々は恒に交わらず鳴き草木の囁きは時をわかつとすると (4)および(2)は、解答できない。

○ (1)ごくあたりまえの考え方を持つ人々、私たちと対照的な考えをもつ人々 (4)音なき空虚を歴然と見わくる目の発明 (4)自然を深く考えず、ただ自分の回りにあるものとしてとらえている平凡な人 (2)私たちは、自然の無辺な広大な讃歌を聴く、すばらしいものとするのだから、その考えを、全面的に否定していこうとしているが、そうはいかない。それは、理想・希望であり、それができないから「哀歌」なのである。だから、結局は、「無縁の人」と同じである。が、同じであることに、抵抗を感じている。

④ タイトルには、「哀歌」とある。なのに、詩中では、「讃歌」とあるのは、なぜか。まず、(1)「讃歌」の、ここでの意味・誰の誰へのという関係をはっきりさせた上で、(2)説明しなさい。

○ (1)うまく言えない。鳥々や草木の囁きの私への讃歌 (2)わからない。

○ (1)讃歌の意味そのもの・私の、私の愛する人(自然)への讃歌 (2)愛する人には、讃歌を与えたい。でも、与えられないので、「哀歌」となる。愛する人は、讃歌と聴きたくて聴ける。私は、聴きたくて聴けない。

⑤ 「あわがひと」につづく二つの「文」のうち、(1)はじめの文の主語・述語、および、(2)あとの文の主語は何か。

○ (1)目の発明・何になろう。(2)目の発明

○ (1)はじめは、「空虚・忍びこんでいる」と考えたが、「発明の・何になろう」と考えなおした。(2)まず、述語でまよった。「如かない」なのか「何になろう」なのかと。けっきょく、「遍照さするのに」——「何になろう」とつづく倒置法とすることになったが、かんじんの主語は、不明。

⑥ 「歴然と見わくる目」とは、(1)何をどうする目で、(2)それは「私」によつては、何とくらべて、どう評価されているのか。

○ (1)音なき空虚をはっきり見わける目 (2)④「切に希われた太陽」とくらべて、「殆ど死した湖の一面に遍照さする」のに及ばない。おとっている。④「切に希われた太陽をして 殆ど死した湖の一面に遍照さする」のにくらべて及ばない。おとっている。この二つ見の意見がでて、まとまらなかった。

○ (1)輝くこの日光の中に忍びこんでいる音なき空虚を 歴然とわくる目 (2)わからない。とにかく、私には、二人の関係がさめていくのがわかっていても、どうにもならないのである。

⑦ 「如かない」とは、(1)何(X)が、何(Y)に、そうなのか。さらに、(2)Yを、詳しく説明しなさい。

○ (1)X 目の発明 Y 遍照さするの (2)話し合ったが、わか

らなかつた。

○ (1) X 音なき空虚を歴然と見わくる目の發明 Y 人気がない山に上り切に希われた太陽をして殆ど死した湖の一面に遍照さする(2)二人の間にできた溝をただ見つめてゐるよりも、人工的に作られた、すなわち希望を積極的によつて、今の二人の冷たい間を殆ど死した湖に太陽が照つて復活するように、もっと埋め合わせた方がよかつたなあと、後悔している。

⑧ タイトルを「わがひとに捧ぐる、讃歌」としたら、どうなると思うか。

○ どういうことを答えればよいのかよくわからないが、「讃歌」というのは、「ああ わがひと」以下の後半と矛盾するからおかしい。

○ 「捧ぐ」とすれば、作者の恋人を高く持ち上げて、何か作者としても理想的で何よりも大事な人だという事になるが、「与つ」としてゐる点で、理想的な人ではない事を裏ににおわせてゐる。

このように、グループごと^①に検討し、さらに、全体に発表し討議する中で、センチンス別の内容は、ようやく、つぎのようには理解できたようである。

① 現実はどうであれ、「私」は、頭の中に「太陽」を輝かせて、「わがひと」と山へ向かう。

② たとえ、悪魔が地獄へ誘つてゐるのであつても、この誘われて山へ向かう「清らかさ」を、ひたすら信じる。

③ 人が何と言おうとも、「意志の姿勢」で、自然の、私たちへの「讃歌」を聴く。

④ また、この太陽のもとには実は空虚さがと、見抜くことの大切さなどは、一蹴する。

⑤ そして、切に希われた太陽のもとに、何ものにも妨げられない世界を構築することは、できた。

こうして、わたしたちは、「理」による吟味によつて、伊東静雄の「精妙な計算」の、小さな「入り口」にさしかかることはできたようである。もちろん、この「計算」が、ことほどさように形式にとどまるものではないことを省みながらのことである。

三 「入り口」での問題点

このように、わたしには思いもよらなかつた「着語」のひとつひとつに、「理」からの発問を試みると、それを受けたグループでは、それぞれの「理解」の実態を、冷静にみつめなおす態度が生まれる。一方、わたしは、「着語」のよつて立っていたそれなりの「理」に思いあたり、そこから、「入り口」を求める方法について、深く教えられる。

① 語の、日常レベルでの「理」を、まずみつめることの大切さ。

前述のように、わたしたちは、えてして、詩のことばに偏見を持つていて、「理」をなおざりにして、「何か日常性を越えたものが」と、まず求めがちである。これは、伊東静雄の「計算」に対しては、とりわけ有害である。

たとえば、「太陽」にしても、「太陽」そのものを詩から遊離させての議論へと走る。このときこそ、つぎの吟味が求められる。

まず、「太陽」の、日常性の中のさまざまイメージを、出し

合い、整理はする。

つぎに、接続詞「あるいは」について、その日常における意味・用法を、具体的な文例によって吟味する。

さらに、動詞「希う」の持つ二面性に注目し、「事実」と「認識」との差をつかむ。

以上三点を重ね合わせて、わたしたちは、「太陽」からの一つの「入り口」を、はじめて確かなものにすることができる。

② 文とその構造を確認することの大切さ。

わたしたちは、えてして、直感的に目についた語や文節から、いちはやく、手前勝手なイメージをつくり出すために、文の「理」を離れてしまいがちである。

まず、文の形をしっかりとっておさえる。句点を具体的につけてみるだけで、すぐさま、早とちりが修正され、構えが確かなものになる。

つぎに、文の構造にたち入ってみる。主・述の関係が確かめられていなかったことが、すぐに省みられる。たとえば、「何になろう」や「如かない」については、とりわけその確認が求められる。

同様に、修飾・被修飾の関係の吟味も、おろそかにできない。たとえば、二つの「とも」にかかわる関係や、結びの一行の「に」については、これを確認することなしには、直感の奔放にのみ流れ、「入り口」を見失なうばかりとなってしまう。

③ 直感の鋭さと奔放さとを生かすことのむずかしさ・大切さ。

わたしたちの教室では、「理」を求められると一見しどろもどろではあっても、不思議と、「何となく」という言い方の中に、時折、核心をつき、きらりと光る一言が生まれる。

しかし、同時に、その一言も、ともすると、ただただ膨張の一途

をたどり、奔放に流れる。やはり、よく耳をすまし合って、一言、「入り口」となることばに、共通の場を求め、おたがいのエネルギーを押しつぶさないように、心をくばり合わなければならぬ。

ふり返ってみると、すべての一言は、「入り口」で実はあったのだと、悔やまれる。ふと深い世界を示唆してくれた一言が、時間や怠惰の中に消え失せて、二度と蘇らなかつた事実を、ひとりひとりとともに思う。

わたしたちは、おたがいに、直感を嘲笑したり、奔放さをひたすらおさえにかかって、己の論理の中のみ引き入れようとして、せっかくの「入り口」を見失なうのである。

④ 「理解」と感動とは、かならずしも一致しないことのむずかしさ。

○ この詩は、作者が苦勞してつくりあげた世界についてかかれているが、なぜここまでつくりあげなくてはならなかつたかを考えると、それだけ実際に、自分の理想通りにいけない現実があるからではないか。

○ これで、作者は、まったく思いどおりの理想郷をつくりあげたはずなのに、それは、実にきびしい孤独の世界であつたと思う。それは、あまりにも現実を、「無縁の人々」の意見を排除してきたからではないのか。そして、「わがひと」と二人きりで、その世界にひとりきれない不安感があるからではないのか。(原文のまま。傍線加藤。)

右の二例は、いずれも、ごく一般的な「理解」と説明とにとどまっていたり、「わがひと」のあり方についても、「着語」の段階から本質的にあまり深まっていはいないようである。こんな例もある。

○ 思いどおりにいかない現実を脱することができるとを希い／手をかたくみあわせしずかに歩いて行った／だれがどこへ誘おうとも関係なく／そこへ向かう自分たちの自然な成り行きを私は信ずる／事実をありのままにうけとり、自然などにあまり興味を／示さない人にとっては、わからないかもしれないが／それら滑らかさをひたすら信ずる心で聞けば／たんなる鳥々の声、草木の囁きも広大な讃歌にきこえるのだ／ああ わが愛する人よ／他の考えを無視して日光を輝かせてきたが／その中には空虚さが忍びこんでいるという人がいる／しかし私たちはそういうことをなんとも思わないのである（注）現実を無視しだれもいない山にのぼり、最後の力をふりしぼり／切に希われた自分たちの太陽をつくる／だれもいないしずまった湖にその太陽を照らし／自分の思いどおりの世界をつくるのである。（原文のまま。傍線・符号、加藤。）

一見きれいな「解釈」である。しかし、たとえば、傍線部（一）から（子）について、よく耳を傾けてみると、やはり、感動や共感には、至りえてはいないと言わざるをえない。「理」による「逆算」のきめの荒さからくる限界が、ここに定着してしまつたと、省みられる。

おわりに

① まず、よく聴き入る耳を持ち、記述と整理とを怠らず、臨機応変に、必然のひと言を示し合えるようでありたい。

② 「理」を強調しすぎたために、伊東静雄への、あるいはあつたかも知れない別の「入り口」を、塞ぎはしなかったか。

③ 「自虐的に抑止」された「リズム」にふれえなかったため

に、詩の生命を忘れてしまつたのではなからうか。
④ 何よりも、昭和十年前後の「現実」を、現代に蘇らせえぬまに終つてしまつた。

「うたうことの困難な時代」の、「息苦しいまでに緊迫した、傷ついた抒情」（注10）とか、「暗黒世相」・「リリックのない時代」（注11）とか、歴史と伊東静雄の個性との織りなすありようは、現代に生きるわたしたちに、とりわけ昨今、きわめて重要な問題を提起している。にもかわらず、この「入り口」の、何と、それにはほど遠いことか。

その隔りをそのままに、伊東静雄の世界は、遠いままで終つたようである。

注1 伊東静雄が、本歌集名をそれにならつたという、ヘルダーリンの詩の題に、「メノンがディオティーマに与ふる哀歌」と使われている。

2 井上靖の、小高根二郎著「詩人伊東静雄」推薦文の一部。

3 佐藤昭夫「抒情詩と現代——静雄・中也の場合——」（『国語科通信』NO.30）

4 大岡信「抒情の行方——伊東静雄と三好達治——」（『文学』一九六五年一月号）

5 那珂太郎 座談会「萩原朔太郎をめぐって」中の発言（『国語通信』1974-11）

6 桑原武夫「伊東静雄詩集」解説

7 拙稿「わたしの授業計画」（筑摩版「現代国語」）学習指導の研究3「無常ということ」を参照されたい。

8 他に、「そんなに凝視めるな」・「冷めたい場所で」・
「自然に、充分自然に」・「秋の海」・「詩作の後」の五
編。

9 4に同じ。

10 大岡信「現代詩人論」

11 萩原朔太郎「わがひととに与ふる哀歌——伊東静雄君の詩に
ついて——」

(付記)

本稿は、一九七六年八月一二日の、広島大学教育学部国語教育
学会での発表に、加筆したものである。お励ましくくださった清水
文雄・野地潤家両先生、長田久男・永尾萱曹両氏に、記して感謝
の意を表わしたい。

一九七六・九・一二記

(大阪府立豊中高校教諭)